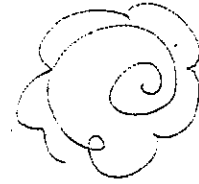


基礎演習 A

よくできました!

なぜ吹奏楽部には女子生徒が多いのか



国際文化学部 1年

学籍番号:

Blank boxes for student information.

I. はじめに

「吹奏楽」という言葉を聞いて、大学生のわたしたちが思い浮かべること
 といえば、高校や中学での「吹奏楽部」を思い浮かべる人が多いと思
 う。高校や中学のときの吹奏楽部を思い浮かべてみると、吹奏楽部は、
 女子生徒が人数のほとんどを占めている場合が多いように感じる。ある
 調査で、女性が八割を占める対象の大学生のグループに対して、高校で
 していた部活を聞いたものがある。その調査の中で答えられた部活の中
 で一番多かったのは吹奏楽部であった。ということは対象者の中に女性
 が多いと吹奏楽部だった人数も多いという調査結果が出ている。(参照：
 池上, 2009, p. ^{頁番号}「高等学校吹奏楽部におけるジェンダー」) 実際、私は
 中学、高校と吹奏楽部に在籍していたのだが、中学では私たちが三年生
 になったときに初めて男子生徒が一、二人入ってきたほどであった。ま
 た、高校では毎年すべての学年に男子生徒はいたが、やはり全体の人数
 の一割ほどしかいなかった。友人に尋ねてみても吹奏楽部において男子
 生徒はほんの少しいるかいなかったという意見がほとんどだ。そして、
 私が吹奏楽部に在籍していたときは、自分の中でその状況を「吹奏楽部
 は女子生徒が多い部活なのだ」と何の根拠もなしに思っていたし、特に

疑問を感じたことも無かった。しかし、大学生になって吹奏楽部を少し離れてみると、なぜ吹奏楽部には女子生徒が多いのだろうという疑問を感じるようになった。音楽系で同じく演奏する部活動としては軽音楽部が挙げられるが、軽音楽部に在籍している生徒は吹奏楽部のように女子ばかりで男子は少ないという印象を感じたことはない。本稿ではなぜ吹奏楽部に女子生徒が多いのかという疑問を明らかにしていきたいと思う。

II. 戦後における吹奏楽部の歴史

本稿で吹奏楽部の女性が多い理由を述べるにあたって、戦後における吹奏楽部の歴史、男女比の変遷は必要不可欠であると考えため、少し簡単に戦後における歴史や変遷を述べようと思う。

学校教育における吹奏楽は戦後の混乱が落ち着いてきた昭和20年代から40年代にかけて活発になる。また、吹奏楽コンクールなどを主催している吹奏楽連盟は戦前(1939年)にすでに発足しているが、戦後とともに全日本吹奏楽連盟と名称を変えて活動を続けている。全日本吹奏楽連盟が主催する全日本吹奏楽コンクールは2014年に第62回を迎える。昭和40年代までは、下の項でも述べるが、男性が主として吹奏楽部が運営されているところが多かったが、昭和40年から昭和50年代にかけて吹奏楽部における女子生徒の人数が増え、昭和44年のあるアンケートでは47%が女子部員と、ほぼ男女比が半分にまでなっているということがわかる。また別の調査では昭和50年代には吹奏楽部における女子生徒の数が男子生徒を越えており、昭和50年代には吹奏楽は「女子生徒が多い部活」として認知され始めたのだと考えられる。「特に21世紀に入ってから『吹奏楽ブーム』とよばれる現象すら起きており、吹奏楽にかかわる中学生、高校生の数は少子化にもかかわらず相当数のぼ

っていると言われる。」(池上, 2009) ともある。最近では吹奏楽をテーマにした映画、ドラマなども作られドキュメンタリーで一つの吹奏楽部を追いかけている番組もあるように吹奏楽部は今、多くの日本人に認知されていると考えられる。(参照: 森田 2005 「クラブ活動としての吹奏楽の変遷」)

III. 考えられる理由と考察

吹奏楽部に女子生徒が多い理由の一つ目としてあげられるのは吹奏楽部における男子生徒の減少である。女子生徒の増加ということを裏返せば男子生徒の減少ということになるからだ。まず吹奏楽というのは元々軍楽隊(軍隊に所属する音楽隊)に起源を持っており、野外演奏が多かったこともあり、もともと男性の多いものであった。また、「昭和40年代までを知る人の記憶の中では、吹奏楽部というと男子のクラブというイメージが支配的だろう」(森田 2005)ともあり、今のわたしたちの思い浮かべる吹奏楽部のイメージとはまったく違うということがわかる。昭和40年代までは吹奏楽部は今のよう女子生徒が圧倒的に多い部活ではなく男子生徒が多い部活だったのだ。ではなぜ男子生徒が減少したのだろうか。その理由として推測されるのはギターブームである。「1960年代から1970年代にいくつかのギターブームが起った」(森田 2005)とされている。実際、私の父親は1965年生まれなので少しブームの時期とは外れているが、話を聞いてみるとその頃はフォークソングなども流行っており、自分も実際にギターを中学三年生から高校生にかけて練習していた、とのことでありその頃に大きなギターブームがあったようだ。吹奏楽にはたくさんの楽器の種類、パートがあるがギターのパートがある譜面はほとんどなく(最近の歌謡曲などは別だが)、ギターは吹奏

楽にはない楽器である。それによって音楽系に興味がある男子生徒たちはそれまで音楽系の部活動では主流であった吹奏楽部ではなくギターの方へ流れていったのだと考えられる。ギターといえば、一人で弾く弾き語りやバンドがある。バンドに注目しながら音楽番組を見ていると最近では女性主体や女性だけのいわゆるガールズバンドというのも増えてきている。しかし昔は特にだが、今も男性バンドを見かけることが多いような印象を受ける。

二つ目の理由として考えられるのが女性の社会進出である。「1960年代にアメリカで始まったウーマンリブの運動は日本へ伝わり、男女の性による社会的役割のうえでの差別の解消を過激に主張した」(森田 2005)^(原)とある。日本では戦前から女性解放運動が積極的になされ、特に戦後から大きく動き出すようになった。戦後、女性参政権が1946年に実現し、1947年の教育基本法で男女別学ではなく多くの学校が男女共学に変化した。戦後から徐々に社会に多くの女性が進出するようになっていった。前段落で吹奏楽部はもともと男子生徒が主流な部活であったと述べた。そして軍楽隊に起源をもつという歴史からも『吹奏楽は男子がするもの』という考えがあったのか「富山県立富山工業高校では昭和51年度まで女子部員を禁止していた」とあり、昭和51年度までは女子生徒が吹奏楽をするまでもなく、できなかつたところもあるようである。しかし、主に戦後における女性解放運動や先に述べたアメリカ発信のウーマンリブ運動により男性のものであった吹奏楽部にも女性が進出していったということが考えられる。

IV. まとめ

以上のように、以前の吹奏楽部というものは男子生徒の多いものであり、

一時期の吹奏楽部では女子生徒が禁止されている部活もあったほど男性主体の部活であった。しかし1960年代から1970年代にかけてのギターブームで吹奏楽ではなくギターを始める男性が増えた。それに加えアメリカで始まったウーマンリブ運動の波が日本にも押し寄せ、それにより男性主体だった場所にも女性が進出することが社会的に多くなった。これが吹奏楽部から男子生徒が減少し、また女子生徒が増加した理由の一つであると考えられる。

【参考文献】

池上徹（2009）「高等学校吹奏楽部におけるジェンダー —大学生への調査から—」『関西福祉科学大学紀要』

森田信一（2005）「クラブ活動としての吹奏楽の変遷 —女性進出の視点から—」『富山大学教育学部紀要』

阿部勸一（2001）『『ブラバン』の不思議』『ブラスバンドの社会史 軍楽隊から歌伴へ』青弓社

0318

